

エッセイを通して「国際協力」を身近に考える

「エッセイを書くことを入口に、国際理解の一步に繋げること」。

1962年から始まったJICAのエッセイコンテスト。60年近い歴史の中で、様々なテーマや内容で継続実施しており、毎年たくさんの生徒たちが世界に目を向け、行動に移すきっかけとなっています。

今回は、そんなエッセイコンテストの魅力に迫るべく、JICA地球ひろばの担当者の櫻井さん、そしてエッセイコンテストを積極活用・サポートしてくださっている3名の先生方にお話を伺いました。

初めに、エッセイコンテストの趣旨や実施者の想いを、JICA地球ひろばの櫻井さんに伺いました。

「エッセイコンテストを学校教育に組み込む」というと、生徒にどのように興味をもってもらうか—自発的に調べて主体的に考えることで思考の掘り下げにつながるのか—等、難しいことを考えてしまうかもしれません。でも実は、そんなヘビーなことは求めていないんです(笑)

エッセイを書くことで、生徒が自分と向き合い、社会のできごとを「自分ごと」にするきっかけにしてほしいと思っています。アウトプットとしてエッセイを書くからには、何かしら調べと思うし、最初は映像を見てとか簡単なことでいいと思うんです。生徒が「私たちから始まる一歩」、自分たちの気付きから行動までを考えて書いて欲しい、そういつも思っています。

エッセイコンテストの提出作品を読んでいると、「こんなことが気になっている」「こんなことやっている」と、具体的に気づいて行動している生徒さんがたくさんいて、日本の未来は明るい！と感じてます。



JICA地球ひろば
櫻井さん

エッセイコンテストに応募されている先生方に、コンテストに向けた学内での働きかけや生徒の学び・波及効果についてアンケートでお話を伺いました。

【ご協力いただいた先生方】
荒川 裕紀 先生(明石工業高等専門学校)、門林 良和 先生(興南中学校・高等学校)、森 恵美子 先生(伊予農業高等学校)

ポイント

① より多くの生徒の
きっかけになるように

ポイント

② 参加時期毎に異なる
生徒の学び

ポイント

③ エッセイコンテストがもつ
生徒への波及効果

- エッセイコンテストの告知は5月、締め切りは9月中旬。そこで1年生全員と3年生の一部は夏休みの課題にエッセイを組み込み、全員分を取り纏めて応募している。
- 教科(グローバルスタディーズ入門・世界史)の課題として、全員分を取りまとめて応募している。
- 応募の事前準備として、JICA施設の訪問や授業を通じて世界と自分との関係性を考える機会をつくり、エッセイテーマを見つけるきっかけを提供している。

- 入学時は遠い世界を想像しながら書いていた生徒たちが、学年が上がるにつれ、より自分の身近な生活の中に世界へとつながる扉を発見するようになった。
- エッセイコンテストの事後活動として、1年生は全員が校外の発表大会に参加し、同年代の生徒が国際問題や国際協力をどう捉えているのかを知る機会を作ることで、エッセイの経験をさらにその後の教育コンテンツの一つとして、利用している。

- このエッセイコンテストによってJICAを知った学生が、現役学生(専攻科生、大学の3・4年生に相当)の間にJOCVとして2名参加しました。
- ここ数年でエッセイに参加後、本校独自のスタディーツアーに参加する流れが確立しました。
- 3年生は進路選択に直面するときでもあり、農業高校生として環境や農業への学びを深めているとともに、進学後の研究テーマへの影響があった生徒もいた。
- エッセイを通じ自分の知識や経験の中にあるものを言語化していくことで、思考が整理されるのを感じています。

実はあまり知られていない「副賞」について

上位受賞者は、1週間の海外研修に参加できます。この研修では、中学生と高校生が一緒に参加して、途上国の生徒と交流をしたり、海外の暮らしや文化に触れたりしながら様々な経験を積みます。参加した生徒にとっては、自分が現地で出来ることを頭で考えていった出発前と、実際に現地で体験して帰国したときの感情や考えの変化からの学びがあったり、国際理解について語り合える仲間作りができるなど、未来に向けた多くの財産を手にいれることができます。また、応募者全員に参加賞もあります。



「エッセイコンテストでは、調べて感じたことを言語化するだけではなく、その後に実際に見て、語って、更に視野を広げる機会があります。全ての参加生徒にとって、より知識や思考を深めたり、将来を考えるきっかけになって欲しいと思っています。みなさんのご応募お待ちしております！」

過去のエッセイコンテストはこちらからご覧ください！

JICA 地球ひろば